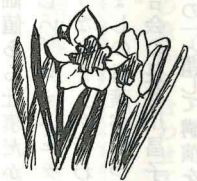


仙台司教区

教区事務所だより



(第 65 号)
昭和58年3月1日

教皇、今年を「贖いの聖年」と宣言

信仰生活の基本確立と回心がねらい

教皇ヨハネ・パウロ二世は昨年11月、救い主イエズス・キリストのご死去一九五〇年にあたる今年を聖年と宣言された。すでに発表されたようにこの特別聖年は「贖(あがな)いの聖年」と名づけられ、3月25日(神のお告げの祭日)に始まり、来年4月22日(復活の主日)で終了する。

「聖年」とはなにか

ひと言でいえば、教会の定めによつて私たちが救いの恵みを受けられる特別な期間である。救いの恵みとは全免償(めんしょう)とその他の霊的恩典を指す。したがつて聖年はただ何周年記念のお祝い行事ではない。大切なことは、私たち一人ひとりがこの機会に救いの恵みを確実にすることであつて、聖年の儀式も行事もすべてこれを目的にしている。通常聖年は二十五年ごとで、一九七五年の次は紀元二〇〇〇年とされていた。しかし、今回のように特別聖年もあつて、キリスト死後

一九〇〇年の一九三三年も聖年であつた。

贖い主、イエズス・キリスト

贖いの言葉の意味は、金を出して罪をまぬがれること。それをイエズス・キリストが十字架上の死で、私たちの罪をつぐない消して下さつたことに用いる。それでイエズス・キリストは人間の贖い主といわれる。人間の本当の意味の救いは、イエズス・キリストに預かれることであり、それより大きな恵みは考えられない。このことは福音宣教の根本であり、また私たちの信仰生活のすべてということができる。

教皇のおのぞみ

教皇は、教書「贖い主の扉を開け」で贖いの聖年と名づけた理由を述べているが(カトリック新聞2月20日号)、その真意は、私たちが信仰生活の中心であるイエズス・キリストの救いの業をよく認識し、真の救いを目指して努力してほしいという願いであること

に疑いない。こうした信仰の最も基本的なことに関心を寄せる教皇は、すでに二つの回勅「人間の贖い主」と「いつくしみの神」を發布した。次回シノドス(世界代表者司教会議)のテーマも関連している。

私たちの心がまえ

聖年には巡礼などの行事や全免償のための条件といった具体的なことがあるが、まず私たちが聖年を迎える準備、心がまえがある。それは贖い主イエズス・キリストの救いの業を深く黙想し、自分自身の信仰を確かなものにすること。もうひとつは全免償の条件であり回心のあかしにもなる「ゆるしの秘跡(告解)」をよく理解し、与ることである。個人としても共同体としても、こうした準備にとめることが切にのぞまれる。



司教日程

(2月16日現在)

- 3月10日 桜の聖母短大卒業式(福島)
- 14日 司教評議会(仙台)
- 17日 白百合短大卒業式(仙台)
- 19、20日 花巻教会訪問
- 21日 司教評議会(仙台)
- 25日 ドミニコ学院校舎落成式(仙台)
- 26日 ウルスラ会管区総会(仙台)
- 30日 聖香油ミサ・助祭叙階式(仙台)
- 3月31日 復活主日(元寺小路)
- 4月3日 復活主日(元寺小路)
- 4日 教区司祭団役員会(仙台)
- 7日 ウルスラ学院職員始業ミサ(仙台)
- 8、9日 神学校常任司教委員会(東京)

教区の聖年行事

詳細は追って発表の予定



教皇は贖いの聖年実施にあたり、ローマとともに世界各地で行われるようぞまれた。教区もこの線にそって聖年行事を考えるがまだ確定していない。全免償や霊的恩典を受けるための行事は次のように予定される。

- ① 3月27日(枝の主日)に聖年開始の儀式をカテドラルや各教会で盛大に行う。
- ② 期間中カテドラルで聖年のための司教ミサを何度か行う。
- ③ 各教会で聖年のためのミサ、みことばの祭

板垣、川村両神学生

聖水曜日助祭に叙階

教区の衆望をになつて、板垣勤、川村英成の両神学生が、いよいよ助祭に叙階されることになった。助祭叙階式は来る3月30日午後7時半、カテドラル(元寺小路教会)での聖香油ミサ中に佐藤千敬司教によって行われる。助祭は聖体授与、祭壇での説教などの任務を持つが、一年以内には司祭叙階が予定されており、近い将来に教区の新しい戦力としてミサをささげる姿が待ち望まれる。

板垣神学生は花巻教会出身、川村神学生は大湊教会出身だが、地元教会と共に全教区の信徒が両神学生のために祈ろう。

儀、教会の祈り、共同回心式などを行う。
④ 教区内の主要聖堂を指定して、個人、グループで巡礼を行う。

⑤ 各教会や地区で聖年の意向にしたがつた集会などがすすめられる。
⑥ 海外、あるいは国内の巡礼旅行を行う。

全免償などの恵みを受けるためには、教皇の意向にしたがつた祈りと個別のゆるしの秘跡(告解)を行うことが必要条件だが、それと同時に聖年のテーマにしたがつて、それぞれが信仰生活を見直す機会にしよう。また今年の年間司牧目標「小教区にキリストの平和を」の具体的実践には、聖年における霊的恩典が大きき力となるものである。

なお当日、佐藤修神学生が教会奉仕者に任命される。

第一回教会報担当者の集い

23教会が参加、体験発表!



2月11日(建国記念日)、仙台教区の教会報担当者のつどいが元寺小路教会信徒館で開かれた。はじめに佐藤千敬司教があいさつ。教会報の仕事は過去、現在、未来を越えた教区の歴史を形作る価値ある仕事だから、困難に負けず続けてほしい。コミュニケーション年のことしこのような集まりが行われることは喜ばしい、と励ましの言葉があった。

つづいて女子パウロ会の長谷川昌子修道女が「新聞の意味するもの」と題して講演を行った。

そのなかで日本のマスメディアの歴史と新聞の機能についてわかり易く説明。一般新聞も全国紙と地方紙ではその性格もおのずから違うように、カトリック教会においても、全国紙であるカトリック新聞と地方紙である教区報、そして教会報は、それぞれ性格が異なり、それぞれ特性を生かした新聞作りをするようにと具体的に助言を与えた。

講演の後、この集いに参加した二十三教会三十三人から、それぞれ教会の広報の現状が報告された。大きな教会では毎月の教会報の外に毎週小さなお知らせを出すなど二段、三段がまえて広報を徹底しているところから、まだ教会報を出していない教会まで多くの体験をわかちあい、お互いに良い意味で刺激される事が多かった。そして教会報の交換などを話しあった。

最後に三浦平三神父が集いをしめくくり、教会報編集者はまずカトリック新聞、教区事務所だよりをよむなどして、教会の動向に敏感であつてほしい。また教会報を作る時は、主任司祭とよく話しあい、信徒の話も聞き、教会のふんいきを捕えた上で教会の意向を正しく伝えること。そして今年には教区司牧目標の「小教区の平和」と、「償いの聖年」この二つが今年の私達の教会の当面の目標であるので、この基本線を保ちながら記事を書くべきであろうと教区の立場を述べた。

この集いが一回で終ることなく、また続けられるよう願いながら第一回仙台教区教会報担当者のつどいを終了した。

修道女の

「祈りの週間」 3月25～31日



仙台でも
オリエンテーション行われる

日本全国の修道女約八千人が、3月25日から一週間、シスターズ・ウィークとして特別な祈りの期間を過ごすことになった。

それに先立つてさる2月13日午前10時30分より、仙台・聖ウルスラ家政専門学校で東北地区の修道女のためにオリエンテーションが開かれた。集会には東北各地から約五十人の修道女が参加、世話役として来仙した援助マリア会管区長春日撮子修道女、上智大助教授鈴木隆氏が祈りの週間の主旨を説明、実際に一日目の祈りのテーマを黙想してわからぬいを行なった。

この祈りの週間(シスターズ・ウィーク)は、日本女子修道会総長管区長会が本年度のテーマ「日本の教会における女子修道会の進むべき方向とこれからの歩むべき道」にしたがって設けたもの。修道女が真剣に誓願生活を見直し、誓願を通してキリストを証しするため、同じ時に心をひとつにして祈ろうというものである。

計画は昨年から進められ、全国九か所の地域でオリエンテーションを行うなど実施にそなえているが、祈りのパンフレットを日本語のほか、英、仏、スペイン語でもつくり宣教師たちのためにも配慮している。ちょうど特別聖年の開始と同じ3月25日に始まるが、各

修道会での事情もあるので一応、3月25日から一か月の間にこの意向に合わせて祈るよう幅をもたせている。

及川神父の指導で黙想会

岩手地区カテキスタ

1月16日から19日までの三日間、盛岡市ベトレム会本部で、岩手地区のカテキスタ七人が黙想を行なった。これまで研修会は毎年行っていたが、黙想会は今年が初めて。

「キリストとの出会い」というテーマで、神言会の及川正神父が指導にあたった。及川神父はかつて花巻でカテキスタとして働き、そのあと、司祭召命を感じて神言会に入会した方。黙想会は及川神父の豊富な経験をもとに、現代に生きるカテキスタに神はなにを望まれているかを、世相を見つめながら深く考え合った。

塩町教会

いよいよ聖堂建築



資金集めに信徒の力結集

八戸・塩町教会の聖堂新築工事は、このほど設計ならびに施行業者も決定して、4月10日に起工式が行われることになった。3月には隣接のウルスラ修道院の一部が工事のため解体される。工事完成は今秋と予定され、すでに11月23日(勤労感謝の日)に、教皇大使ガスバリ大司教、佐藤千敬仙台司教を招いて

荘厳に献堂式が行われることになっている。

塩町教会の聖堂新築には、信徒が丸となくって建築資金の準備に働いた。信徒各家庭が十万円以上の寄付をよせている。その結果、信徒やその関係者の寄付申込みが四千五百五十万円。また、教会主催のバザー、映画会、廃品回収などが生み出した資金は二千三百万円にもおよんでいる。その他全国の善意の方々からもすでに百万円以上寄せられており、聖堂建築に示された信徒の力はすばらしいものでないで、今年もがんばろうと信徒一同大いに盛り上がっている。

主任神父様

御存知ですか?

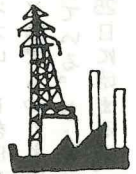
カトリック新聞十週間無料贈呈制度!

一昨年からカトリック新聞十週間無料贈呈制度があることを御存知ですか。

これは、その年成人式をむかえた人、洗礼を受けられた人に限ります。教会の主任神父様が(本人でなく)カトリック新聞に申し込んで下されば(但し、送料二百五十円は教会負担)十週間無料でカトリック新聞が本人に送られます。

十週間後も引き続き購読してもらおう事がねらいですが、この意向をおくみ取りいただき、主任神父様各位の御協力を、お願い致します。

おしらせ



●練成会(第一回)

テーマ // 招きに耳を傾けて //

(結婚・独身・修道者・司祭)

日時 昭和58年3月26日午後5時から

29日正午まで。

場所 東仙台・光ヶ丘研修所(仮称)

対象 高校生以上の男女

定員 四十人(定員になり次第締切り)

参加費 学生一五千元、一般一六千元

申込み 仙台市本町一の2の12 仙台司教

区事務所練成会係(申込用紙で)

主催 神学生養成委員会

●盛岡の聖年の行事

「ヨーロッパ巡礼とスイスへの旅を

シュミドリン神父と共に」

盛岡地区の聖年の行事の一つとして志家
教会のシュミドリン神父を団長に左記のよ
うなヨーロッパの旅を計画している。

△コースV フアチマ・リスボン・マドリ

ード・ルルド・ジュネーブ(晴天の場合モ

ンブラン)・シオン城・ローザンヌ・シュ

ミドリン神父の故郷ワレン(二日間民宿)等、

ルガノ・ベニス・フィレンツェ・アジジ

ローマ・パリ。

費用 約八十五万円

出発 7月22日。帰国 8月13日。

希望者は盛岡志家教会のヨゼフ・シュミド

リン神父までご連絡下さい。

「日本のようなカトリックでない国で、

しかも自分しか信者でない家庭から、どう

して修道生活に入ったのですか」とアメリ

カで聞かれたことがある。

神は、洋の東西を問

わずお好きのままに私

たちをお呼びになる。

そして、その呼びかけ

方もいろいろでもしろい。

ある人にとっては、お見合いの時間と場

所をまちがえたことが、自分と呼んでおら

れる神のお声を確かめるきつかけになつたり、

またある人の場合には、修道院の台所へこ

神の呼びかけ

用聞きに出入りしていて修道者の生き方に
感じ、宗教を学んで生涯を労働修道士とし
て賭けるようになったりなど。――

しかし、神の招きではあつても未知への

出発には不安がつきま

とう。そのゆるる心を

しっかりと勇氣づけ希

望に変えてくれるのは

先人の模範であり、健全な信仰と愛で支え

てくれる仲間である。神の招きに応えた者

に、この世界はすばらしい。

コングレガシオン・ド・ノートルダム

福島修道院 木村 きぬ

●主とともに八十字架の道行と黙想V

奥村一郎著(女子パウロ会) 四百円

多忙な日々の中で四旬節を良く過そう

と思う人のために手ごろなイエズスの

受難と復活を黙想できる信仰の書。

●めざめて祈れ

カール・ラーナー著 初見まり子訳

(中央出版社) 六百円

キリストの受難の神秘と最後の七つの

みことばを主題とする黙想の書。

●新約聖書のイエス像

井上洋治著(女子パウロ会) 千円

日本人の心情でとらえたイエズスの姿

とその魅力をさぐる異色の書である。

読書案内



●主日の説教A聖書と典礼V

山内清海著(あかし書房) 三千元

毎日曜の聖書の朗読箇所が書かれそれ

に基づいて黙想できるよう理論的に体

系された解説がある。毎日曜日のみサ

の準備のため、よい助けとなる。

●中学生のいる風景

半田茂雄著(中央出版社) 千四百円

現代の中学生の問題は益々深刻さをお

びてきている。中学校教諭として毎日

中学生と接している著者が教育の現場

から彼らを取りまく諸問題を具体的に

取り上げ、エッセイ風に書いたもの。

△福島V●福島県では昨年から県連ニュース（福島県信徒連絡協議会ニュース）が年に数回発行され、県内の動き、教区の動行など、より詳しく知ることができるようになった。

●野田町教会では日曜日の神父様の説教をテープにおさめ、貸し出し、活字化等、積極的な利用に供されており、信徒に喜ばれている。

●矢吹町（白河巡回布教所）の信徒とグアダルベ会の熱意で教会建設が実現しようとしている。「福島県のつどい」でもこの事が明らかにされ、県内の教会同士の助け合いが一層深まり具体化への大きな推進力となっている。

●福島・松木町教会の佐々木信夫氏は、インドのマザー・テレサの家でボランティアとして体験学習をするため出発した。同氏は桜の聖母短大教授であるが、大学を一年休職しての渡印である。

△宮城V●中学生問題が深刻化している中で、宮城県の信徒中学生を対象に各学年ごとに1月末から数回にわたり、早坂養吉医師の指導で性教育に関する勉強会が行われた。

●教会学校リーダー研修会が2月12日の土曜日の夕方からドミニコ会のペロー神父を指導者に四旬節の準備として、「キリストの受難と復活をどのように教えるか」をテーマに行われた。毎月一回のリーダー集會を始めて四年になるが、今年あたりから各県との横のつながりを持っていくべく各方面のバックアップを願っている。

各地の話題

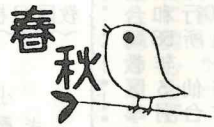


△岩手V●本年度の教区目標「小教区教会にキリストの平和を」を受けて岩手県ではさつそくその具体策が県内の司祭会議で話し合われ、その結果、教区目標に関する指針が県内の各教会の全信徒に配布された。内容は、「心を一つにして祈る教会」「心を一つにして信仰のために迫害を受ける兄弟のために祈りましょう」「祈りにもなり実践」の三つに分けられ、より具体的な心構えが示されている。

△青森V●八戸・塩町教会所属のボーイスカウト青森第21団は今年も早朝ハイクを実施した。今年白菊学園生徒会館に宿泊、朝5時に出発、8キロ歩いて塩町教会に到着、ミサに出席し、豚汁で体を暖め、元気に散会した。この行事は20年間続けられ、ガールスカウト青森4団も17年間早朝ハイクに参加している。

●八戸・塩町教会では毎年1月中旬新年会を開いているが、今年1月16日第二ミサ後、較教会信徒、田面木の聖ウルスラ会のシスターも参加して総勢百三十人で大豚汁会が開かれた。数十万円のカラオケの機械も持ち込まれ、飛び入り出演者も多く自慢の声を披露。年頭司教書簡を受けて、まさに「キリストにおける大家族」の喜びをわかち合った。

2月16日より四旬節 償いの愛の犠牲、祈りと献金を 忘れないようにしよう。



この頃よく思い出すことばに「PRの三原則」がある。ご存知ですか。頭を使う。お金を使う。しかし期待しない。期待だけが大きくなって、頭

もお金も使っていない、使いたくない、のが人の常かも知れない。そして紛争が絶えない。考えてみると、争いが絶えないのは当然のことである。

この三原則の中にキリスト教の精神をみるのは私の勝手に推測だろうか。人にはそれぞれに神からタレントが与えられている。そのタレントを最大限に使うことは神の要請に応える人間の、本来の姿と言えよう。

お金、これはもの、所有の最たるものである。ものが人を支配するのではなく、本来は人がものを支配するのである。人のためにものがあるのであって、もののために人があるのではない。

人はそのタレントを十分に用い、人のために備えられたものを使ってその生を完うする。そしてなおかつ「わたしはなすべきことをしたまでです」と言いうるならば……

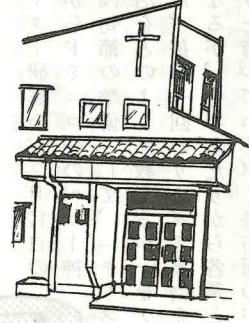
このように考えてみると、PRの三原則は人生の三原則といつてもいい代物かも知れない。

(狼河原)

おらが教会

(29)

宮城・巨理教会



仙台から南へ約26キロ、宮城県最南端に広がる巨理平野は、東に海水浴場で知られる鳥の海、西に阿武隈山脈、北に阿武隈川を擁し、東北の湘南地方とも言われております。

巨理教会は海と山と川に囲まれ、気候は温暖な恵まれた自然環境の中に位置しています。

古くから城下町として栄え、四百年の後の現在も城下町の風情が町の各所に残っていますが、最近では人口も二万九千人と増加し、以前には見られなかった家並みと通勤と通学の人々が新しい町の風景をぬりかえつつあります。

教会は昭和27年、元寺小路教会の主任司祭であった齋藤石雄神父様が巨理町に住む叶源次郎さん宅で毎週日曜日にミサを行ない、求道者の教理指導をしたのが始まりと言われています。その後叶さん宅を譲り受け、仮教会としてトラピスト会の山下房三郎神父様が初代の常任司祭に任命されました。その後山下師が外遊し、司祭が不在となつたため、司教館付の深沢豊治神父様が主任司祭として巨理に赴任、自炊生活をしながら信徒を司牧、山元

町の国立療養所への布教も再開されました。昭和34年、当時の教区長小林有方司教が米田ボストンから受けた寄付一万ドルを基金に、現在地に当時としてはモダンな聖堂が新築されました。

その後は豊田政夫神父様が昭和37年から9年間司牧活動にあたり、現在の巨理カトリック幼稚園は、昭和39年に、地域の幼児教育のため聖堂を活用して開設されたものです。

豊田神父様が大河原教会へ転任した後の5年程は巡回教会になりました。

昭和51年、高田徳明神父様を主任司祭にむかえ、巨理教会は新たな転機をむかえました。

それまでは月に二、三回のミサにあずかるだけでほとんど信徒活動らしいものはなく、「私たちの教会は小さいから何もできない」という考えが、いつの間にか「何もなくてもよい」というような考えに変わっていた時の事でした。この様な時に、高田神父様は、教会維持費や各種の献金についての重要性を、いつも力説し、教育して下さいました。その結果聖堂のなかつた当教会によりやく小さいながらも祈りの雰囲気のある木造の聖堂と司教館を建てるまでに成長しました。高田神父様は当教会の主任司祭であるばかりではなく角田教会の主任と両教会の幼稚園長を兼務しており、信徒のための聖書研究、子ども達のための土曜学校など、精力的な活動を続けておられます。

当教会の信者数は、地域的に巨理町、山元町地区の信者と岩沼市・名取市地区の信者と

から成っており、両地区合わせても信者数は百人足らずの小さな教会です。しかしながら交通の便があまり良くないことなどもあり、現在岩沼地区でも、月二回、日曜日に各信者の家庭を巡つての御ミサが行われています。

このことは岩沼地区の信者にとって御ミサにあずかり易いという利便を生みましたが、日曜日の御ミサが二分されるためか、教会全体としての盛り上がりは今ひとつ欠けるような気がしています。

それでも御復活祭とクリスマスの年二回は両地区の信者が一堂に会しての御ミサ、そのあとのアガベ(?)、余興などを通して、兄弟的愛を深めながら楽しくやっています。

昨年は、角田教会の信者さん達との交流も行われました。最近では、毎月一回岩沼地区、巨理地区合同のミサを持つてはと、そろそろ納骨堂を作つては、などと新しい息吹きも感じられるようになってきました。

なお当教会出身の聖職者として、現在八戸の較教会主任の渡辺昭一神父、そして5人の修道女があり、活躍していることも特記すべき事でしょう。(目黒記)

教区目標

小教区教会に
キリストの平和を!!
(仙台教区)

仙台司教区事務所だより第65号

昭和58年3月1日発行

発行所 仙台司教区事務所

980仙台市本町一丁目2番12号

TEL 0222 22 7371